

児童心理学の進歩1999年版 抜刷

第1章 発達研究の現在

——社会=情動的分野の進歩——

高橋 恵子

金子書房

第1章 発達研究の現在

——社会=情動的分野の進歩——

高橋 恵子

はじめに	2
I 発達心理学の現在	2
1. “ <i>Handbook of child psychology</i> ” 5版	2
2. 5版で注目される新しい分野	3
3. 感情の研究	5
II 生涯発達心理学の現在	7
1. サクセスフル・エイジングの研究	7
2. パーソナリティの生涯発達研究	10
3. 対人関係の生涯発達	13
おわりに	22

はじめに

本稿では発達心理学の社会＝情動的な側面の研究の進歩について述べる。

「I 発達心理学の現在」のセクションでは、社会＝情動的な側面の発達心理学での新しい展開を概観する。それにはまず、15年ぶりに改訂された“*Handbook of child psychology*”の5版における社会＝情動的な側面の発達心理学の状態に注目したい。おそらくこのハンドブックが現在の発達心理学の動向をもっともよく代表しているにちがいないからである。加えて、関連するいくつかの文献にも触れる。次の「II 生涯発達心理学の現在」では、発達心理学の新しい分野として台頭してきた生涯発達心理学に絞って、社会＝情動的な側面の具体的な研究の進展と問題について述べることにする。

I 発達心理学の現在

1. “*Handbook of child psychology*” 5版

“*Handbook of child psychology*”は1946年に“*Carmichael's manual of child psychology*”として始まった。これが準備されていたのは戦時下であったことは当時のわが国の状況からすれば驚きであるが、Carmichaelも戦争時で苦労が多かったと書いている。その後、このハンドブックは1954, 1970, 1983, そして、1998年とほぼ15年おきに改訂され続け、それぞれの時期の発達心理学の動向を如実に反映してきた。5版(Damonほか, 1998)の筆頭編集者を務めたDamonが前書きでこのハンドブックの歴史を述べていて興味深い。

Damonによると、このハンドブックの各章が現在の発達心理学の章立て(たとえば、理論、心理言語、攻撃、愛着、創造性、発行動学など)で構成されるようになったのは3版(1970年)からだという。たしかに3版ではKagan, Feshbach, Hartup, Maccobyなど現在でも大きな影響力をもつ人々が執筆している。3, 4版(1983年)ではMussenが編集の指揮をとり、

Carmichaelの死後の4版からは書名も“*Handbook of child psychology*”に変えられた。この4版は当時の発達心理学の隆盛を反映して、3版の3倍もの紙数になり全4巻で構成されるという大部なものとなっている。これが、今日まで「マッセンのハンドブック」という愛称で世界中の発達研究者に親しまれてきたものである。1980年にはアメリカ心理学会(APA: American Psychological Association)から発達心理学をタイトルにもつ学術雑誌“*Developmental Psychology*”が発刊されるようになり、4版が作られた頃ようやく発達心理学が心理学界で市民権を得たというべきであろう。

引退したMussenに代わってDamonを代表編集者とする5版は全4巻、71章からなる。判型もひとまわり大きくなり、大規模な改訂版となった。1巻「理論」、2巻「認知発達」、3巻「社会＝情動的発達」、4巻「実践の場での吟味」で、編者はそれぞれLerner, KuhnとSiegler, Eisenberg, SigelとRenningerである。5版を見ると1980～1990年代の発達心理学の特徴がみえてくる。Damonはそれまでの発達心理学の三大理論であった、Piaget理論、精神分析、学習理論の影響が4版(1983年)では弱まったことを指摘している。5版ではその傾向がさらに強まるとともに、新しい方向が出てきたと思われる。特に、本稿で扱う社会＝情動的発達の観点からは以下の3点を注目すべきものとして指摘しておきたい。

2. 5版で注目される新しい分野

a. 生涯発達への関心

第一は、ハンドブックに発達を生涯にわたって(life-span,あるいは、発達社会学ではlife courseで)見るという、“生涯発達”を扱う章が初めて登場したことである。たとえば、発達理論の1巻をみると全19章のうち、心理学のBaltesらの章と、社会学のElderの章が占めており、また、Lernerも発達理論の章で生涯発達の視点の重要性を説いている。さらに、3巻ではCaspiがパーソナリティの生涯発達を述べているという具合である。生涯発達心理学への関心はわが国でもようやく高まりをみせ、講座が出されたり(無藤ほか, 1995)、テキストが作られたり(たとえば、村田, 1994)している。本稿では

この生涯発達心理学について後に詳しくみることにする。

b. 文化心理学の復興

第二にはハンドブックに文化についての関心の高まりが読み取れることである。人と文化の関係を扱う章が、社会化、環境、ニッチ、エコロジーなどの既存の概念化とは別に、あるいは、それを含み超えるものとして、“文化心理学”というタイトルで登場したのはこの版が初めてのことである（1巻）。わが国でも文化心理学への関心は高まりを見せ、本が出版されたり（たとえば、波多野・高橋，1997；柏木ほか，1997；北山，1998），学会でシンポジウムが開かれたりもしている。

しかし、文化を扱う心理学そのものは決して新しいものではなく（Jahoda & Krewer, 1997；星野，1997），80年代からリニューアルされたというのが正しいであろう。リニューアルは主に3点についてなされたといえるであろう。第一は文化の定義が注意深く練られていることである。文化心理学という文化とは、集団内で共有される行動的な習慣と信念体系のセットである（Shweder ほか，1998）。より具体的には、個人が日々交渉している他者および人工物の全体である。人工物には社会的組織・制度、習慣・価値・常識、さまざまな情報、そして設備や道具が含まれ、これには過去の歴史、経験と知恵が集約されていると考えられる（Cole, 1996；波多野・高橋，1997）。第二は文化を独立変数として扱い、文化の人間に対する影響をみるだけでは物足らなくなったことである。人間と文化は相互に浸透しあっているために、独立変数と従属変数という具合には分離できないと考える研究者（たとえば、Shweder, 1990；北山，1998）が出てきた。個人と文化とが融合しているという考え方は概念的にはもっともらしいが、これをどのように実証するかはこれからの課題である。そして、第三にはそれぞれの文化に対する尊敬の念が広まったことであろう。今や“native”の目で文化を理解すること（たとえば、Geertz, 1988）は常識である。ハンドブックの1巻にアフリカン・アメリカンとラテン・アメリカンにおける発達を述べる章が設けられたことも、欧米の研究者の文化をとらえる姿勢が変化したことをうかがわせる。もしも“native”の目で見ようとするのであれば、研究方法も再検討しなければならない。実際、1997

年に改訂された“*Handbook of cross-cultural psychology*”の2版（Berry ほか編）でGreenfield（1997）は方法論について書き、測定された得点を文化間で単純に比較するやり方を“方法論的行動主義”だと警告している。

c. 実践と発達研究

第三には発達研究を実践の場で見直すという観点から編集された4巻がハンドブックに初めて登場したことである。この巻は日常生活の中で発達研究の意味を問うべきだという最近の大きな流れとともに、北アメリカの研究者たちの社会的な問題にいち早く積極的に取り組む姿勢を反映しているといえよう。この巻で扱っている実践の場とは家庭、学校はもとより、臨床・福祉の現場、さらには、学校、福祉、矯正プロジェクトにかかわる行政までの広範囲にわたっている。そして、マス・メディアと発達についての文化を扱うそれぞれの章がこの巻に設けられていることも興味深い。

1983年の4版では、実践と発達研究を扱う章は3巻の「社会化と社会的発達」で部分的に設けられていたにすぎない。この意味で、Damonのハンドブックは社会の中で人間発達を見ようという姿勢が徹底していると評価できるし、日本の発達研究が学ぶべき点が多いとも思われる。

3. 感情の研究

a. 感情の研究の高まり

1998年の日本心理学会第62回大会（東京学芸大学）でのIzardの招待講演は大変な盛況で、感情への関心の高さがうかがわれた。このような関心からすると、Damonのハンドブックでの感情の扱いには不満があろう。5版では4版と同じく攻撃と反社会的行動の章があり、加えて感情発達の章が設けられたが、これは主として乳児から小学生までの感情の伝達機能や社会化が主な内容であるからである。

Izard（1991）によれば「感情はヒトの進化の過程で発達した適応的装置である」、「感情のともなわない行為はない」、「感情は知性に対立する概念ではない」などと指摘してきた何人もの優れた先達がいちにもかかわらず、心理学研究において感情研究の意義が正当に評価されるようになったのは80年代からで

あるという。事実、1985年には国際感情学会 (ISRE: International Society for Research on Emotions) が設立され、1987年には感情に関する学術誌、“*Cognition & Emotion*” が「感情がかかわる心的過程の研究」を掲載しようと始まった。そして、2001年にはAPAから“*Emotion*”というタイトルの学術誌が出るのが予告され、すでに準備が進められているという勢いである。

感情研究の現状を知るにはやや古くなったが、“*Handbook of emotions*” (Lewis & Haviland, 1993) が便利である。これは44章からなる大部なもので、感情研究における基本的な情報をできるだけたくさん提供し、どのような研究があり、誰が研究しているか、そして、感情が人間理解にとっていかに重要であるかを示すことがねらいとし、1. 感情は学際的に見る必要があること、2. 感情の神経・生理学的アプローチが進んでいること、3. 感情は他の心的プロセスと関連していること、4. 感情は社会化され発達すること、5. いわゆる喜怒哀楽など個別の感情についての成果、を示す5部で構成されている。執筆者として欧米の代表的な感情の研究者を総動員しており、これを見ると多様な学問的背景をもつ研究者（心理学、認知科学、文化人類学、脳科学など）が感情研究にかかわっていることがよくわかる。なおこのハンドブックは、アメリカ合州国で1995年の Choice of outstanding academic book 賞を受けている。

b. 戸田のアーヂ理論

感情についてのユニークな理論、アーヂ (urge) 理論を提案している戸田が、7章からなる“The urge theory of emotion and cognition”を発表し、前著 (戸田, 1992) の修正版を完成した (Toda, 1993~1998) ことに触れておきたい。戸田の基本的立場は「感情は整然とシステムの組み上げられた人間の環境適応の仕組みである」と考えるものである。緊急事態が頻発する“野生の環境” (戸田によれば農耕の開始と同時に人間が手を加えた“人工の環境”ができたがこれはたかだか1万年でしかないの、人間を含めて動物にとっての環境とは“野生の環境”である) では、なるべく時間をかけずにすばやく情報処理をし、うまく対処することが人間の生存にとって重要である。そして、アーヂとはこの適応的な行動をすばやく選択するために人間に遺伝的に備わっ

たものであり、感情よりは広義だとする。アーヂ理論はなお発展している上にスケールの大きなそれであり、したがって、疑問な箇所も多々ある。しかし、どうみても輸入超過のわが国の学問状況からすれば、すでに海外で注目されている戸田理論の全貌が英語で発表されたことは、嬉しいニュースである。ぜひ、内外の多くの研究者に関心をもって欲しいものである。

II 生涯発達心理学の現在

先に述べたように、生涯発達心理学の台頭は著しいものがある。だが、生涯発達心理学とはよく誤解されるように、ただ単に乳児期から老年期までの発達を網羅すればよいというものでもないし、中高年期の心理学と同義でもない。生涯発達心理学とは発達心理学の一分野であって、発達を生涯にわたって見通すという視点をもつことを特徴とする。いわば広角レンズで人間の一生の発達を見ようというものである。生涯発達心理学の、現在の主要な研究課題は、(1) 発達にはどの程度の連続性があるのか、そして、(2) 発達の軌跡はいかなるものか、という問題である。これを見るために必要になるのは、生涯にわたって発達を見る理論的枠組みとそれにもとづく測度である。以下では、この理論と測度とを提案している研究をとりあげてみよう。

1. サクセスフル・エイジングの研究

はじめにとりあげるのは、P. B. Baltesらの生涯発達心理学である。人間の発達を一生涯を視野に入れて考えるという発想は18世紀のヨーロッパにはすでにあつたといわれるが (Baltes, 1987)、実証科学として生涯発達心理学を今日あるように定着させたのは70年代からの Baltes の努力であつたことは周知のとおりである。Baltes は生涯発達心理学がいかなるものであるかを“Life-span development and behavior”のシリーズの10巻までの出版に編集者の中心となって努力をし、あるいは、国際行動発達研究学会 (ISSBD: International Society for the Study of Behavioural Development) の会長を務めて、この学会を生涯発達の研究発表の場として特徴づけるなどしてきた。

a. SOC モデル

Baltes らが生涯発達を記述する有効な理論的モデルとして提唱しているのが SOC (selection, optimization and compensation) である (たとえば, Baltes, 1987, 1997; Baltes ほか, 1998). 彼らの研究の中心課題はどのようにしたら“上手に年をとれるか”の追究である。すなわち, Baltes らのいう上手な加齢とは彼らが好んで使うサクセスフル・エイジング (successful aging) (たとえば, Baltes & Baltes, 1990; Baltes ほか, 1998) ということばに集約されているように, 齢を重ねながらも「獲得を最大に, 喪失を最小にすること (maximizing of gains while minimizing losses)」である (Baltes ほか, 1998, p.1054). このように生涯にわたってコンピテンスが維持できることを上手な加齢だといいきるのは, 西欧文化のせいかもしれない。老いていくことそのものを受け容れ, 老いそのものに価値を見出すような思想 (たとえば, 赤瀬川, 1998) から見るとやや違和感があるであろう。

Baltes らによれば, サクセスフル・エイジングは SOC によってなされているという。サクセスフル・エイジングとは Baltes らが好んで例にあげるピアニスト, ルビンシュタインのような場合だという。すなわち, 80歳のルビンシュタインはテレビのインタビューに答えて, 肉体的な衰えを補うために作品を限定し (selection; 自分の目標を選び, それに集中すること), 若い頃にもましてその曲の練習に時間をかけ (optimization; 目標の達成のために努力したり, 手段を工夫すること), 早く演奏すべき箇所を際立たせるために, 直前の数小節をゆっくり演奏するように工夫している (compensation; 最終的な目標に達することができるようにやり方や考え方を修正したり, 必要な道具を使ったり, 他人の援助を受けること) としたというものである (Baltes ほか, 1998, pp. 1054-1059). この SOC によって, 聴衆は最晩年のルビンシュタインの演奏に酔いしれた, つまり, 彼はこれによってコンピテンスを維持したというものである。このモデルは加齢における個人の適応的な努力を記述するモデルとして興味深いものであり, また, 現実にそのようなことがおこっているであろうことは想像に難くない。彼らは SOC を測定する方法を面接で調べる試みを始めているが (Baltes ほか, 1995), 質問項目を見る限りでは,

SOC をしそうな一般的態度を測定するものになってしまい, 理論的に考えられていた面白さは失われてしまっている。これをルビンシュタインのエピソードを超えて, どのように実証していくかはこれからの課題であろう。

SOC が知的コンピテンスだけではなく, 社会的コンピテンスにもあてはまるかどうかを, Carstensen (たとえば, Carstensen, 1992) がカリフォルニア大学バークレー校の人間発達研究所の縦断的資料を使って, 加齢につれて重要な対人関係の相手が変わってくることで示している。SOC のこの分野での有効性についての実証的検討は, 以下に述べる Staudinger らの章を含めてようやく始まったところで, 今後の展開が楽しみである。

b. Berlin Aging Study

Baltes の主張や理論の実証的な基礎をつくっているのは, 彼がディレクターのひとりであるベルリンのマックス・プランク研究所と M. M. Baltes (1999年2月に急逝した) を中心とするベルリン自由大学の心理学ユニットの老年精神医学科 (Gerontopsychiatry) のスタッフによる努力にほかならない。特にこの研究チームでなされている通称 BASE (Berlin Aging Study) は, “very old age” といわれる最晩年の人々の研究にのりだし, 生涯発達心理学に最終段階の人間のデータを提供している点で重要なものである。

BASE は旧西ベルリン在住の70歳以上103歳までの高齢者500余名を対象とする研究で, 心理学, 社会学, 老年学, 医学などの研究チームによる横断的および縦断的研究 (70歳から 95+ 歳を 5 歳刻みの 6 つのコホートにわけて横断的に調べるとともに縦断的にも追跡する) である。この研究については学会や “Psychology and Aging” 誌の特集など (Baltes ほか, 1997) で報告されてきたが, 全体は本として出版された (Baltes & Mayer, 1999)。

BASE では最晩年のコンピテンスの維持と増進がテーマである。知的機能, 自己とパーソナリティ, 対人関係, 社会的活動について多様な既存の測定具が使われているが, 研究の中心は知的コンピテンス, すなわち, 知的機能の維持・促進にある。生理的制約 (biological constraints; 年齢に代表される運動感覚的加齢) と個人的制約 (ontogenetic constraints; 階層, 学歴, 職業, 収入など) が, どのようにかかわりあって, 高齢者のコンピテンスの維持・促

進を支えるかを明らかにすることにある。

本稿の中心的関心である社会=情動的側面については Baltes らの本 (Baltes & Mayer, 1999) では18章のうち2章が割かれている。対人関係の章 (Wagner ほかによる) では超高齢者の対人関係が社会的状況 (子どもの有無, 配偶者を失って現在一人か否かなど) によって異なること, 加齢につれてサポートを受け取る割合が多くなるものの, サポートの提供もしていることなど, が報告されている。また, 自己, パーソナリティ, 自己統制についての章 (Staudinger ほかによる) では, 超高齢者の自己, パーソナリティと QOL (生活の質; quality of life) との関係, および, 自己, パーソナリティが加齢に伴う生理的な衰えといかに関連するかという問題に注目し, 自己, パーソナリティが SOC に関連していることを検証しようとしている。具体的には, たとえば, 面接の中から13種のコーピング・スタイル (たとえば, 昔と比較する, 情報を得る, 他人と比較する) をとりだし, これが QOL といかにかかわっているかをみるなどの分析を試みている。

われわれがこの大きなプロジェクトにもっとも期待するのは, 社会=情動的側面と認知的側面との関連である。おそらく, 自己はこれを統合的にみる重要な切り口になると思われるのだがどうであろうか。Staudinger の章でしばしば使われる「自己」ということばにはまだ実体がない。今後の分析に期待したい。

2. パーソナリティの生涯発達研究

パーソナリティの生涯発達についての研究は, さまざまな年齢に使える測度を開発し, 同一のものさしで繰り返し測定する方法で, 加齢に伴う連続性の問題にそれなりの回答をしてきたといえる。たとえば, パーソナリティの5因子モデルにもとづくテストを用いた研究は, テストを繰り返し施行することで, この種のパーソナリティ特性が3~30年の間隔をおいてどの程度安定しているかについての資料を提供している。相関係数の値は間隔, 実施された年齢, サンプルによってさまざまであるが, 間隔が短いほど, また, 成人期以後ほど, 数値が大きい (これについての文献総覧としては Baltes ほか, 1998; Dig-

man, 1990; Goldberg, 1993; John, 1990が便利である)。

a. Block らの縦断研究

ここでは Q 分類を用いて新しい展開をみせている Block らの縦断研究 (たとえば, Block, 1971, 1981, 1993; Gjerde, 1993; Gjerde ほか, 1998; Ozer & Gjerde, 1989) を紹介したい。この研究に注目するのは, 第一には, いわゆるパーソナリティ・テストが使える調査対象の下限はせいぜい10歳程度であるのに対し, Q 分類を観察者が行うという Block の着眼で, 子ども (子ども用 CCQ; California Child Q-set, Block & Block, 1980) からおとな (おとな用 CAQ; California Adult Q-set, Block, 1961/1978) までのより広い年齢を使うという強みを発揮しているからである。そして, 第二には, これまでのような変数を中心にした分析 (variable-centered approach) に加え, 人を中心にした分析 (person-centered approach) (Block, 1971) を縦断データで試みて, 両者を同時に使うという新しさをもつゆえにである (たとえば, Gjerde ほか, 1998; Gjerde & Chang, 1998; Ozer & Gjerde, 1989)。

Block らの縦断研究は1968年に J. Block, J.H. Block 夫妻によってカリフォルニア大学バークレー校で, 3歳児120余名で始められた。3~23歳までに8回の測定がなされ (23歳時のサンプル数は103名), 現在も継続されている。Block はこの研究では発達の見かけ上の continuity ではなくパーソナリティの機能や発達における深部構造における coherence の追究が課題であるとしている (Block, 1993)。そして, coherence を見るには多様な方法が必要であるとして, パーソナリティ, 認知, 対人関係に関してさまざまな方法 (L-data; 生活史なども含めた多種の個人情報, O-data; 観察による資料, T-data; 実験やテスト結果, S-data; 自己報告的資料) を用いて資料を集めている。さらに興味深い点は, 子ども時代は訓練されたクラス担任教師と研究者が観察にもとづいて, また, 青年期からはインテンシブな面接をした研究者がそれにもとづいて Q 分類を行うという方法で, 一貫した測定を行っていることである。Q セットはパーソナリティ, 認知, 人間関係について記述する100枚のカードで構成されており, これによって, 3歳から現在 (23歳) までを同じ枠組みで測定できることになる。なお, Q セット自体の信頼性や妥当性につ

いても検討されている (Ozer, 1993).

この縦断的データによってすでにいくつかの興味深い結果が見出されている。まず、いわゆる variable-centered の分析では、発達における性差が一貫して指摘されている。たとえば、(1) 時期ごとの自尊心の得点間の相関係数には性差があること (女子では14歳時との相関係数は18, 23歳と年齢が高くなるにつれて小さくなるが、男子では逆に大きくなっていく), (2) このサンプルの半数が親の離婚を体験しているが、離婚の影響は先行研究同様男子に大きいこと、しかも、やがて離婚することになる家庭の状況の影響も男子により顕著であること, (3) 18歳時のうつ傾向と関連がある3, 7歳時の行動などの特徴も男女では異なること (女子では7歳時にはことのほか良い子であった——はにかみやで、内罰的で、過度に社会化されている——のに対して、男子では3歳から乱暴で手におえない状態であった) などという具合にである (Block, 1993; Gjerde, 1993).

b. 発達の軌跡

さらに、Gjerde が中心になって進めている person-centered な分析を加えた研究は、いくつかの顕著な発達の軌跡を見出している。たとえば、Gjerde ら (Gjerde ほか, 1998; Gjerde & Chang, 1998) は3~23歳のパーソナリティ・タイプをCCQおよびCAQによる“自己の柔軟性” (ego-resilience; 文脈の要請に応じて自己統制を柔軟に変えられるか否かについての個人の許容力) と“自己統制” (ego control; 統制不可能あるいは不十分な統制から、過剰な統制まで、自己統制が可能か否かの程度を区別する) とを用いてタイプにわけている。分析は3または4, 14, 23歳時のQ分類データをまとめて、Q技法による因子分析でなされ、図1のような男女それぞれ3つのプロトタイプを見出している。さらに、Gjerde ら (Gjerde & Chang, 1998) はこの発達の軌跡が23歳時のうつ傾向を予測するのに有効であることを示している。

サンプルをグループとして扱い変数の平均値や変数間の相関を出すという分析だけでは限界があるのはたしかである。個々人を考慮した person-centered な記述や分析への関心は特に社会=情動的分野の研究では古くからあり、これへの挑戦が続けられている (たとえば、Block, 1971; Eysenck & Eysenck,

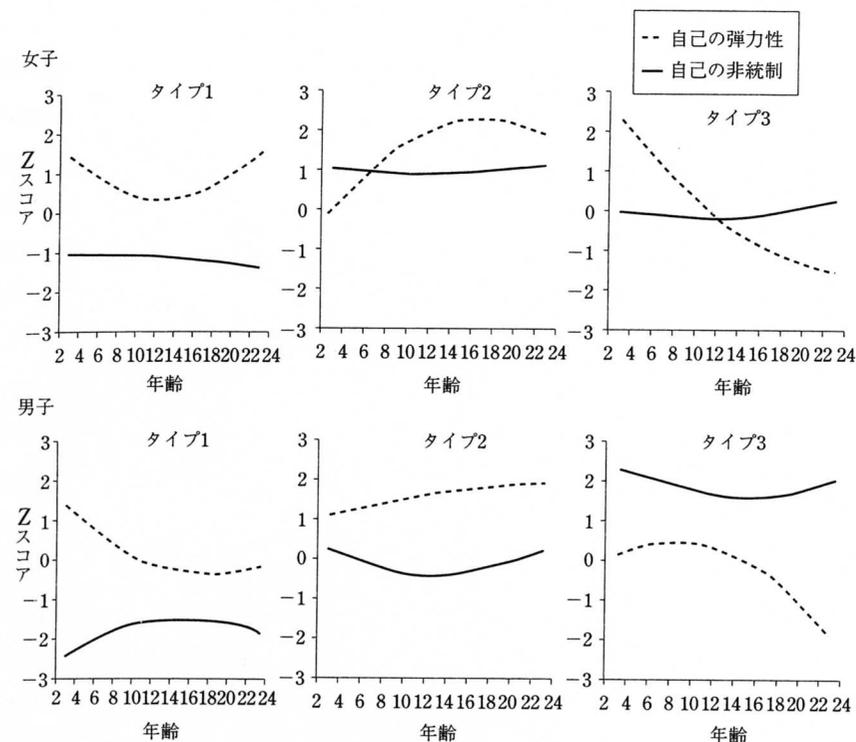


図1 発達の軌跡 (Gjerde ほか, 1998)

1985). この発達の軌跡のタイプを見るという研究は新たなチャレンジとして今後の展開が楽しみである。

3. 対人関係の生涯発達

対人関係に関するデータはこれまで大量に集められてきた。しかし、ほとんどは、それぞれの年齢区分で目立つ人との二者関係を、しかもグループとして扱って、標準的な傾向を把握することに力を注いできたし、その傾向は現在も強い。ここでは、生涯発達という観点から重要だと考える愛着研究とソーシャル・ネットワーク研究を紹介し、生涯発達という視点をもつことで何が見えてくるかを明らかにしよう。

a. 愛着研究

(1) AAIとは

愛着研究が生涯発達を扱えるようになったのは Main らがおとな（18歳以上）に適応可能とされる）の愛着を測定する面接法（AAI: Adult Attachment Interview）（George ほか, 1984/1996）を考案してからである。AAIは幼少期（5～12歳）の親との関係をきく質問を中心にしたほぼ20問（母親との関係を5つの形容詞とその根拠となるエピソードで語らせる、親との分離や心的外傷の体験、そのような体験の現在への影響などからなる）についての1～2時間の個別面接によって、おとなの愛着を測定するというものである。これによって、乳児期の愛着を測定する SSP（Strange Situation Procedure）による愛着の主要な3分類、secure, avoidant, ambivalent/resistantのそれぞれに対応する、secure-autonomous, dismissing, preoccupied/entangledが判定されるというものである。これに加えて、乳児期の愛着の分類で Main が指摘した D（disorganized/disoriented）に相当する基準（unresolved）、および、分類不能のカテゴリも使われている。

AAIの特徴は録音された談話を完全に文字化してプロトコルを作りそれを分析することである。分析は被面接者の表情やことばのイントネーションなどは考慮せずに、プロトコルの言語分析のみによる。分析の基礎になるのは当然 Bowlby の愛着理論であるが、言語哲学者 Grice（たとえば, 1989）の理論に拠っている。Grice が人間同士の真剣な会話には協調性が大切だとし、協調性を実現するために話者が守るべきだとした4つの公準（maxims; すなわち、①質について：真実、証拠のあることを話す、②量について：簡潔にかつ十分に語る、③関係について：関連のあることだけを話す、④様態について：明確に順序立てて語る）が後述のように大きな役割を果たしていることが特徴である。

Main らの基準によれば SSP の secure(B) タイプに対応する secure-autonomous とは、親との関係が良いか悪いかという談話の内容によってではなく、語られ方で決まる。親について談話の中で一貫して同じように（coherent に）、しかも具体的に生き生きと語ったか、あるいは、具体的には思い出せなくとも面接に協力しようと（collaborative に）していたかが重要である。

したがって、secure なタイプは coherent-collaborative と表現されて、Grice の公準のどれにも違反しないものである。avoidant(A) タイプにあたる dismissing と判定される者は、Grice の①質の公準、そして、しばしば②量の公準にも違反しているものだという。すなわち、親を理想化し申し分のない母親であったなどとポジティブに述べるだけで、具体的なエピソードが提示できなかったり、また、幼少期の親については記憶がないとかと会話を止めてしまう場合に dismissing と判定される。最後に、resistant(C) タイプに対応する preoccupied/entangled と分類される者は、親との体験に関する評価がゆれていて（coherent でなく）、時に怒りのニュアンスを帯びていたり、談話がまったく面接者に非協力的になされること（とめどもない長いしゃべりで②量の公準に違反し、質問と関係のない話にそれて③関係について違反したり、さらに心理学のありふれた用語を使う、「……とか、……みたいな」といったあいまいな表現でことばを濁す、子どもっぽい言い回しをする、などで④様態の公準に違反する）が特徴だとされる。Main らは、AAI の欧米の研究を概括し、AAI の3分類の1～15カ月間隔の安定性は77～90%であること、知能、短期記憶、社会的望ましさ、一般的談話スタイルとは独立であること、また、面接者の影響からも自由であること、などが示されているので、AAI は測度として十分なものであると主張している（George ほか, 1984/1996）。また、AAI の妥当性は臨床的な分野では認められている（これについては“*Journal of Consulting and Clinical Psychology*”誌の1996年64巻1, 2号の2回の特集を参照されたい）。

(2) AAI の特徴と問題点

以上見てきたように、AAI の特徴は「おとなの現在の愛着」（あるいは、「愛着に関する心の状態」; Main, 1996）、を「幼児期の愛着の対象についての語り方」で測定できるとすることにある。重要なことは、生き生きと、それぞれの形容句にあった適当で具体的なエピソードを、一貫して語るか否かである。誤解されがちであるが、母親についての過去の事実の記憶だけで愛着を測ろうとしているわけではない。したがって、親についての良い印象だけを語るからといって secure だとはされない。重要な点は、AAI は“今、生き生きと

しかも自発的に幼児期の愛着関係について語れる状態にあるか”によって、現在の愛着を測るということにある。

現在の心の状態が過去についての談話に反映されるという考え方は納得できる。自己についての談話や生活史とは過去の事実についてではなく、現在からみた過去の解釈であるという見解は支持されているものである（たとえば、Linde, 1993; Ochs & Capps, 1996）。実際、筆者らの高齢者の人間関係に焦点化した生活史の分析でも（高橋・飯田, 1998; Takahashi ほか, 1998）、現在語られる生活史には今の人間関係の状態が反映されていると解釈するのがもっとも妥当であると思われた。

AAI は興味深い試みではあるが、ここでは3つの問題を指摘したい。第一には AAI がよって立つ愛着理論から当然であるが、愛着を語る対象を幼少期（5～12歳）の親に焦点化するという問題である。親に限定せず、各人にとっての重要な他者について語る方が理にかなうというのが筆者の立場である。これについては後述する。第二には、AAI が Grice の公準を使った言語分析によっている点である。Grice の公準が会話分析において妥当かについて批判もある（西山, 1992参照）が、発話の上述のような特徴に愛着というような“感情”が十分に反映されるのかという根本的な問題があらう。第三は AAI が使える被調査対象は狭いであろうという問題である。北アメリカに限っても、会話の公準にそって整然と語れるような、あるいは、心理学的な専門語 (jargon) を使いかねないような、階層に限定されるであろう。そして当然のことながら、AAI が英語とそれを規定する歴史=文化的状況に依存しているのはたしかである。したがって、日本語で AAI が使えるようにするまでには、これが適当か否かの判断も含めて、何段階かの翻案が必要で、その努力がようやく始まったばかりである。Main は AAI の面接は訓練された臨床心理学者などには可能だとしている (Main, 1997) が、プロトコルの分析のためには Main らの訓練に参加し、さらに彼女らが示す数十のプロトコルを分析して信頼性（彼女らの分析と80%以上の一致が見られること）が確保されてからだとしている。AAI を使った北アメリカの研究論文が必ず Main らにオーソライズされた分類であることを付記しているのはこのためであることに注意を喚起

しておきたい。まるでシンジケートのようだ、これが科学かという非難は北アメリカでもきくが、マニュアルをざっと見ただけで自己流にやられた研究では議論が始まらないし、データが蓄積されないのはたしかである。愛着研究に限らず、わが国では日本語でやっている限り原著者にはわからないであろうとばかりに、つまみ食いの自己流の翻案をするような甘さがあることをあえて指摘しておきたい。

(3) 愛着理論における発達の連続性仮説

乳児期（ほぼ12～18カ月）の愛着を測定する SSP という強力な測度をもつことで盛んになった愛着研究の大きな転機は何か。それは、乳児期の母親への愛着の質が将来のあらゆるコンピテンスを予測するという“幼児期決定説”ともいわれかねない仮説の説明を、Bowlby が Craik から借用したという internal working models (Bowlby, 1969/1980) に求めた (Bretherton, 1993) ことであらう。SSP で測られる安定した愛着は「相手の行動に応じて自分の行動を計画し、予測し解釈するダイナミックな表象」で「頭の中で人間関係をシミュレートする能力」(Bretherton, 1993)、あるいは、「愛着に関する情報を組織したり、情報を取捨選択する時に必要な規則のセット」(George ほか, 1984/1996) を作るがゆえに、コンピテンスをもたらすというのである。そして、90年代は internal working model の存在、愛着とさまざまなコンピテンスの関係、愛着の3つのタイプの安定性、愛着の世代間伝達などの研究によって、この仮説の検証が試みられた。ここで注目すべきことは、いずれもこの仮説を支持する研究ばかりが北アメリカの有力な雑誌に載りつづけていることである。時の主流グループの仮説に反する研究が世に出難いことは歴史が示すところではあるが。

いわゆる愛着の研究者たちは、幼児期決定説の立場をとってはいないと主張する（たとえば、Sroufe ほか, 1993）が、不安定な愛着が変わるのはごくごくまれだと考えていることはたしかである（たとえば、Bretherton, 1990）。乳幼児期の母親への愛着が後の発達に強い影響を及ぼすという、発達の連続性を強調する仮説は検討されていくべきだと思う。現在の発達心理学の中でこのように発達の連続性を強く主張するのはほとんど母子の愛着関係の分野だけだ

とあってよいだろう。たとえば、近年の resilience という用語で発達弾力性を見ようとする新しい流れやこれを支持する証拠からいえば（たとえば、Freitas & Downey, 1998; Haggerty ほか, 1994; Lewis, 1997）、愛着理論やその研究者たちは発達の事実について頑なでありすぎるし、あまりにも多くを愛着関係で説明しようとしすぎると思われる。

現在の愛着の連続性を主張する研究でもっとも欠けているのは、ひとつには、乳児期以降のさまざまな時期における愛着の質についての情報であり、さらに重要であるのは、それぞれの調査対象のおかれている対人的環境および社会=文化的状況についての情報である。たとえば、同じ調査対象の SSP と AAI で測定した愛着のタイプが77%一致したという時 (Main, 1996)、発達心理学がもっとも関心をはらうべきことは、1歳から18歳の間に何があったかであろう。そのような資料の蓄積がこの連続性を強く主張する仮説を検証するために求められているのである。

そして、これは発達心理学者が早急にとりくまなければならない課題のひとつだとも考える。乳幼児期の母子関係の重要性を主張し、初期の母子関係が後の発達を決定するとし、世代間伝達までを強調するようになった愛着理論には用心が必要だと思われる。それは、学会での議論を超えて、幼児をもつ母親や保育・教育の現場などにインパクトを与え、さらに、政治や行政に安直に利用されかねないなど、社会的な影響力をもつからである。

b. ソーシャル・ネットワーク研究

愛着研究ではたとえ成人でも、乳幼児期の親との関係がとりわけ重要だという仮説に立っていることをみてきた。だが、今や、“人が複数の重要な他者を同時にもつ”ことは人間関係の研究者にとっては自明のことになっている。80年代から活発になったソーシャル・ネットワークの研究はこれを実証的に明らかにしてきた。そして、ソーシャル・ネットワークの研究はさらに新しい展開を始めている。

“人が複数の重要な他者を同時にもつ”ことを認めれば、さらに2つのことを仮定せざるをえない。第一にはその複数の他者は互いに異なる心理的機能を割り振られているであろうということである。換言すれば、異なる機能を果た

すからこそ、それぞれの人物を必要としているにちがいないのである。つまり、重要な他者における“心理的機能の分化”である。そして、第二にはそれぞれの人が自分にとって必要な人間をある必要から選んでいるとすれば、それぞれの人の「対象」と「心理的機能」とをセットにして選ばれた人間の束、対人関係の枠組みは、人それぞれで異なるであろうということである。つまり、“対人関係の枠組みの個人差”である。このような人間関係の枠組みを、生涯にわたってどのように実証的に示すことができるか、また、その変容はいかなるものかが、生涯発達の視点からは重要なことである。この問題に挑戦している2つの研究を紹介しよう。

(1) コンボイ・モデル

人は母艦が数隻の護衛艦に守られているように複数の人との関係を維持して暮らしているとして提案されたのが Kahn & Antonucci (1980) のコンボイ (convoy) モデルである。このモデルでは人間関係について複数の重要な他者を同時に問題にし、その他者たちが心理的機能の重要さの程度が異なる集合を作り、それは階層構造をなしていると仮定している。このモデルにもとづく測度として Antonucci が提案している面接調査では、まず、図2のような3重の同心円を使ってもっとも重要な者から3番目に重要な者までを具体的にあげさせる。次に、あげられた対象のうちの初めの10名について、それぞれの属性、関係、心理的機能を詳しく尋ね、全体で1時間程度の半構造化された質問をする。したがって、それぞれの個人がどのようなネットワークをもっているかについての豊かな情報が集められることになる。しかし、この情報をどのようにまとめていくか、このモデルの利点を活かした分析の工夫はこれからだと思われる。現在までのところ、被調査者全体についてあげられた人数とその内容（たとえば、家族や友だちの割合など）、それぞれの円でどのような機能が多くあげられたか、あるいは、家族または友だちに割り振られた心理的機能はいかなる種類であったかなど、グループとして見た時の傾向の報告にとどまっている（たとえば、秋山, 1997; Antonucci & Akiyama, 1987; Antonucci & Jackson, 1987）。当然、ひとりひとりの報告するコンボイは異なっているわけであるが、何をもって個人の特徴の指標とするかについては、今後の分析

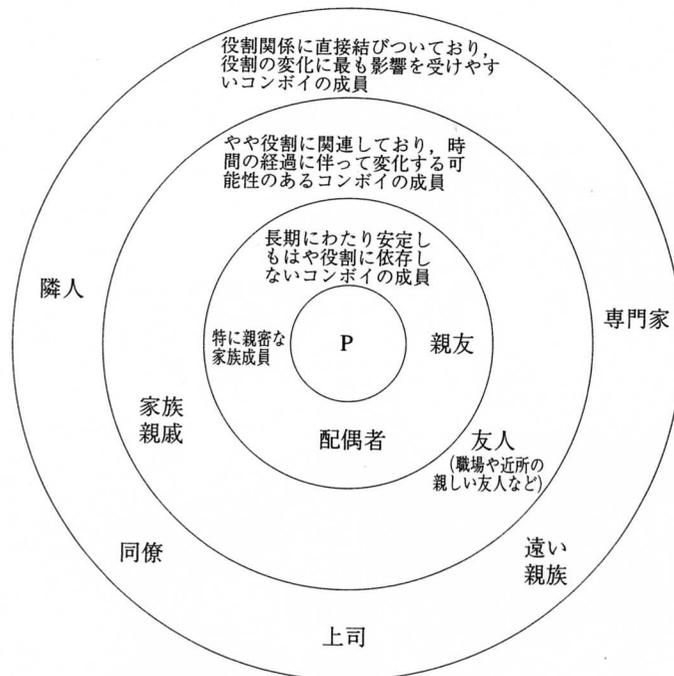


図2 コンボイを調べる3重の円と予想される結果 (Kahn & Antonucci, 1980)

に期待したい。

Antonucciらは中高年を対象に研究を始めたが、この3つの円でネットワークを測定するという方法は幼児から高齢者までに使えるという利点があり、日本を含めさまざまな国の幼児から高齢者までさまざまな年齢の資料が集められつつあり(たとえば、Lang & Carstensen, 1994; Levittほか, 1993)、どの年齢でも、試みられたどの文化でも3つの円の人数を合計して10名内外があげられること、家族が第一の円にあげられる傾向があること、第一の円の対象はすべての心理的機能を割り振られていること、などが報告されている。

ただし、実際に筆者が試みると、図2のような絵を使う測度であるために物理的な距離(同居しているか否かなど)が心理的距離に混ざりやすい、また、実施の仕方や教示にあげる人数が簡単に影響される(熱心に記入すると人数が増える、かける時間によって人数が変わるなど)、などの問題もある。しかし、同

じモデルで年齢を超えて測定できることは大きな魅力であり、複数の他者からなるネットワークの詳細を記述することには成功しているといえるであろう。

(2) 愛情の関係モデル

筆者が提案しているのは複数の他者からなるネットワークを記述するとともに、個人のネットワークの特徴をも明らかにする愛情の関係モデル(affective relationships model)とそれにもとづく測定具である。これは人間関係のうちでも中心部分にあって、ポジティブな感情(それを愛情的[affective]な情動と呼ぶことにする)を交換し合い、個人の存在を支え、変化はするもののある期間は安定している関係を記述するための、対人関係についての表象的モデルである。このモデルではそれぞれの個人は、愛情が向けられる相手である「対象」と、愛情行動がもつ「心理的機能」とをセットにして、まとまりのある対人関係についての枠組みを作っていると仮定する。すなわち、(1)それぞれの個人は多様な心理的機能——人間の存在を支えるような重要な機能から、楽しみを分かちつというような周辺的な機能までを含む——を割り振りながら、自分にとって適当だとして選んだ複数の他者からなる表象的な枠組みをもつこと、ただし、(2)心理的機能の割り振り方にはいざという事態での効率からいって偏りがあり、どの対象かが(時にはそれが複数であることがあっても)相対的に多くの機能を割り振られるために、“中核的な対象”(focus or foci)がある、と考えるものである(Takahashi, 1990)。

このような愛情の関係は、(1)愛情行動を向ける対象、(2)その対象が果たす心理的機能、(3)愛情要求の強度の3要因で測定されると考え、質問票ARS(Affective Relationships Scale)を作成した(Takahashi, 1974; Takahashi & Sakamoto, in press)。これは、6種の心理的機能を果たす愛情行動を記述する項目について、それが向けられる複数の対象(6~8名)について独立に繰り返し評定させるという方法で、「対象」と「心理的機能」とをセットにして測れるようにしたものである。これによって、それぞれの対象が、どのような機能を、どの程度の強さで、割り振られているかが明らかになる。さらに、相対的に愛情要求がもっとも強く向けられた対象を“中核的な対象”として選ぶ。そして、この“中核的な対象”が愛情の関係の枠組みを特徴づけると

いう仮定によって、これが誰であるかに注目して対人関係のタイプを見出し(母親であれば母親型とするなど)、これで対人関係の個人差が見られるとするものである。ただし、質問票式の ARS の使用が困難な幼児、小学生、さらに、高齢者には上述の項目を絵で表した PART (Picture Affective Relationships Test) (Takahashi, 1978/1998; 井上・高橋, 投稿中) を提案している。

同じモデルによる広い年齢に適用できるメジャアができたことで、対人関係の枠組みの様相と年齢や状況の変化に伴う枠組みの変容が明らかにされてきた(たとえば, Takahashi, 1990; Takahashi & Sakamoto, in press)。また、さまざまな年齢の重要な移行期(入園, 入学, 就職など)の縦断研究(たとえば, Takahashi & Majima, 1994; Takahashi ほか, 1997)や実験的研究(たとえば, 鈴木・永田, 1983; Takahashi, 1986)が枠組みのタイプで個人差をみることの妥当性を示している。

おわりに

本稿では発達研究の社会=情動的分野の進歩を、特に、生涯発達心理学に注目して述べた。人間の発達を生涯にわたってみるというこの心理学の新しい分野は、それぞれの時期に焦点化してきたこれまでの発達心理学に対して、新たな理論や測定具を提案し、それによって、発達の連続・不連続の問題を吟味し、それを規定する要因に注目させ、あるいは、発達の軌跡を示すなどと、新しい風を吹き込んでいる。

生涯発達心理学がまだきちんと手をつけていない問題を2つ指摘しておきたい。第一は、社会状況と人間発達とのかかわりについての問題である。社会状況がいやおうなしにわれわれにかかわってくることは Elder の仕事がかねてから示しているとおりである(たとえば, Elder ほか, 1993)。発達はこの歴史=社会的状況と人間との交渉をぬきには考えられないし、生涯発達研究はもっともそれが見やすい分野だと思われる。第二の問題は、発達における「主体としての人間」を理論の中にどうとり入れるか問題である。人間の発達が歴

史=社会的状況をはじめさまざまな制約(constraints)の中でおこることはいうまでもないが、制約を活かし、時には制約を変えさえしている主体としての人間(たとえば, Youniss & Yates, 1997; Yates & Youniss, 1999)をどのように理論の中にくみこむかの問題である。これは生涯発達研究に限らず、21世紀の発達研究に期待されるもっとも面白いテーマのひとつであろう。

付記: 本稿をまとめるにあたって波多野誼余夫氏(慶應義塾大学), AAI については大西美代子氏(カリフォルニア大学サンタ・クルス校)との、議論やそれぞれのコメントから多くの示唆を受けたことを記して感謝いたします。

文 献

- 赤瀬川原平 1998 老人力. 筑摩書房.
- 秋山弘子 1997 ジェンダーと文化——男性と女性の社会的ネットワーク. 柏木恵子・北山 忍・東 洋(編) 文化心理学: 理論と実証. 東京大学出版会. 220-233.
- Antonucci, T. C. & Akiyama, H. 1987 An examination of sex differences in social support among older men and women. *Sex Role*, **17**, 737-749.
- Antonucci, T. C. & Jackson, J. 1987 Social support, interpersonal efficiency, and health: A life course perspective. In L. L. Carstensen & B. A. Edelstein (Eds.) *Handbook of clinical gerontology*. Elmsford, NY: Pergamon Press. 291-311.
- Baltes, P. B. 1987 Theoretical propositions of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, **23**, 611-626. 鈴木 忠(訳) 1993 生涯発達心理学を構成する理論的諸観点——成長と衰退のダイナミックスについて. 東 洋・柏木恵子・高橋恵子(監訳) 生涯発達の心理学 1巻: 認知・知能・知恵. 新曜社. 173-204.
- Baltes, P. B. 1997 On the incomplete architecture of human ontogeny: Selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory. *American Psychologist*, **52**, 366-380.
- Baltes, P. B. & Baltes, M. M. (Eds.) 1990 *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences*. New York: Cambridge University Press.
- Baltes, P. B. et al. 1995 *Measurement of selective optimization with compensation by questionnaire*. Berlin: Max Planck Institute for Human Development and Education.

- Baltes, P. B. *et al.* 1997 The Berlin Aging Study. *Psychology and Aging*, **12**, 395-472.
- Baltes, P. B., Lindenberger, U. & Staudinger, U. M. 1998 Life-span theory in developmental psychology. In R. M. Lerner *et al.* (Eds.) *Handbook of child psychology*, 5th ed. Vol. 1. New York : Wiley. 1029-1143.
- Baltes, P. B. & Mayer, K. U. (Eds.) 1999 *The Berlin Aging Study : Aging from 70 to 100*. New York : Cambridge University Press.
- Block, J. 1971 *Lives through time*. Berkeley, CA : Bancroft Books.
- Block, J. 1978 *The Q-method in personality assessment and psychiatric research*. Palo Alto, CA : Consulting Psychologist Press. (original 1961).
- Block, J. 1981 From infancy to adulthood : A clarification. *Child Development*, **51**, 622-623.
- Block, J. 1993 Studying personality the long way. In D. C. Funder, R. D. Parke, C. Tomlinson-Keasey & K. Widaman (Eds.) *Studying lives through time : Personality and development*. Washington, DC : American Psychological Association. 9-41.
- Block, J. & Block, J. H. 1980 *The California Child Q-set*. Palo Alto, CA : Consulting Psychologist Press.
- Bowlby, J. 1969/1980 *Attachment and loss : Vol. I. Attachment*. New York : Basic Books.
- Bretherton, I. 1990 Open communication and internal working models : Their role in the development of attachment relationships. In R. A. Thompson (Ed.) *Nebraska symposium on motivation : Vol. 36. Socio-emotional development*. Lincoln : University of Nebraska Press. 57-113.
- Bretherton, I. 1993 From dialogue to internal working models : The co-construction of self in relationships. In C. A. Nelson (Ed.) *The Minnesota symposia on child psychology : Vol. 26. Memory and affect in development*. Hillsdale, NJ : Erlbaum. 237-263.
- Carstensen, L. L. 1992 Social and emotional patterns in adulthood : Support for socioemotional selectivity theory. *Psychology and Aging*, **3**, 331-338.
- Cole, M. 1996 *Cultural psychology : A once and future discipline*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Damon, W. *et al.* (Eds.) 1998 *Handbook of child psychology*, 5th ed. Vols.1-4. New York : Wiley.
- Digman, J. M. 1990 Personality structure : Emergence of the five factor model. *Annual Review of Psychology*, **41**, 417-440.
- Elder, G. H., Modell, J. & Parke, R. D. (Eds.) 1993 *Children in time and place : Developmental and historical insights*. New York : Cambridge University Press.

- city Press. 本田時雄 (監訳) 1997 時間と空間の中の子どもたち——社会変動と発達への学際的アプローチ. 金子書房.
- Eysenck, H. J. & Eysenck, M. W. 1985 *Personality and individual differences : A natural science approach*. New York : Plenum.
- Freitas, A. L. & Downey, G. 1998 Resilience : A dynamic perspective. *International Journal of Behavioral Development*, **22**, 263-285.
- Geertz, C. 1988 *Works and lives : The anthropologist as author*. Stanford : Stanford University Press. 森泉弘次 (訳) 1996 文化の読み方・書き方. 岩波書店.
- George, C., Kaplan, N. & Main, M. 1984/1996 *Adult Attachment Interview*, 3rd ed. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- Gjerde, P. F. 1993 Depression symptoms in young adults : A developmental perspective on gender differences. In D. C. Funder, R. D. Parke, C. Tomlinson-Keasey & K. Widaman (Eds.) *Studying lives through time : Personality and development*. Washington, DC : American Psychological Association. 255-288.
- Gjerde, P. F. & Chang, R. 1998 Pathways toward and away from depression : Predicting young adult outcomes from preschool characteristics. Paper presented at the 7th Biennial Meeting of the Society for Research on Adolescence.
- Gjerde, P. F., Chang, R. & Kremen, A. 1998 Life paths through adolescence : A study of developmental prototypes. Paper presented at the 7th Biennial Meeting of the Society for Research on Adolescence.
- Goldberg, L. R. 1993 The structure of personality traits : Vertical and horizontal aspects. In D. C. Funder, R. D. Parke, C. Tomlinson-Keasey & K. Widaman (Eds.) *Studying lives through time : Personality and development*. Washington, DC : American Psychological Association. 169-188.
- Greenfield, P. M. 1997 Culture as process : Empirical methods for cultural psychology. In J. W. Berry, Y. Poortinga & J. Pandey (Eds.) *Handbook of cross-cultural psychology*, 2nd ed. : Vol. 1. *Theory and method*. Boston : Allyn & Bacon. 310-346.
- Grice, H. P. 1989 *Studies in the way of words*. Cambridge, MA : Harvard University Press. 清塚邦彦 (訳) 1998 論理と会話. 勁草書房.
- Haggerty, R. J., Sherrod, L. R., Garmezy, N. & Rutter, M. 1994 *Stress, risk, and resilience in children and adolescents : Processes, mechanisms, and interventions*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 波多野諄余夫・高橋恵子 1997 文化心理学入門. 岩波書店.
- 星野 命 1997 文化心理学の位置づけ. 柏木恵子・北山 忍・東 洋 (編) 1997

- 文化心理学：理論と実証。東京大学出版会。71-75。
- 井上まり子・高橋恵子 投稿中 小学生の対人関係の類型と心理的適応：PARTによる検討。
- Izard, C. E. 1991 *The psychology of emotions*. New York: Plenum. 荘巖舜哉(監訳) 1996 感情の心理学。ナカニシヤ出版。
- Jahoda, G. & Krewer, B. 1997 History of cross-cultural and cultural psychology. In J. W. Berry, Y. Poortinga & J. Pandey (Eds.) *Handbook of cross-cultural psychology*, 2nd ed.: Vol. 1. *Theory and method*. Boston: Allyn & Bacon. 1-42.
- John, O. P. 1990 The "Big Five" factor taxonomy: Dimensions of personality in the natural language and in questionnaires. In L. Pervin (Ed.) *Handbook of personality: Theory and research*. New York: Guilford Press. 66-100.
- Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. 1980 Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In P. B. Baltes & O. B. Brim (Eds.) *Life-span development and behavior*, Vol. 3. New York: Academic Press. 253-268. 遠藤利彦(訳) 1993 生涯にわたる「コンボイ」——愛着・役割・社会的支え。東洋・柏木恵子・高橋恵子(監訳) 生涯発達の心理学2巻：気質・自己・パーソナリティ。新曜社。33-70。
- 柏木恵子・北山 忍・東 洋(編) 1997 文化心理学：理論と実証。東京大学出版会。
- 北山 忍 1998 自己と感情：文化心理学による問いかけ(日本認知科学会(編) 認知科学モノグラフ9)。共立出版。
- Lang, F. R. & Carstensen, L. L. 1994 Close emotional relationships in later life: Further support for proactive aging in the social domain. *Psychology and Aging*, 9, 315-324.
- Levitt, M., Weber, R. A. & Guacci, N. 1993 Convoys of social support: An intergenerational analysis. *Psychology and Aging*, 8, 323-326.
- Lewis, M. 1997 *Altering fate: Why the past does not predict the future*. New York: Guilford Press.
- Lewis, M. & Haviland, J. M. (Eds.) 1993 *Handbook of emotions*. New York: Guilford Press.
- Linde, C. 1993 *Life stories: The creation of coherence*. New York: Oxford University Press.
- Main, M. 1996 Introduction to the special section on attachment and psychopathology: 2. Overview of the field of attachment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 237-243.
- Main, M. 1997 Personal communication.
- 村田孝次 1994 生涯発達心理学入門。培風館。

- 無藤 隆ほか(編) 1995 講座生涯発達心理学(全5巻)。金子書房。
- 西山佑司 1992 発話解釈と認知：関連性理論について。石崎 俊ほか(編) 認知科学ハンドブック。共立出版。466-476。
- Ochs, E. & Capps, L. 1996 Narrating the self. *Annual Review of Anthropology*, 25, 19-43.
- Ozer, D. J. 1993 The Q-sort method and the study of personality development. In D. C. Funder, R. D. Parke, C. Tomlinson-Keasey & K. Widaman (Eds.) *Studying lives through time: Personality and development*. Washington, DC: American Psychological Association. 147-168.
- Ozer, D. J. & Gjerde, P. F. 1989 Patterns of personality consistency and change from childhood through adolescence. *Journal of Personality*, 57, 483-507.
- Shweder, R. A. 1990 Cultural psychology: What is it? In J. W. Stigler, R. A. Shweder & G. Herdt (Eds.) *Cultural psychology: Essays on comparative human development*. New York: Cambridge University Press. 1-4.
- Shweder, R. A. et al. 1998 The cultural psychology of development: One mind, many mentalities. In R. M. Lerner (Ed.) *Handbook of child psychology* 5th ed. Vol. 1. New York: Wiley. 865-937.
- Sroufe, C. A., Carlson, E. & Shulman, S. 1993 Individuals in relationships: Development from infancy through adolescence. In D. C. Funder, R. D. Parke, C. Tomlinson-Keasey & K. Widaman (Eds.) *Studying lives through time: Personality and development*. Washington, DC: American Psychological Association. 315-342.
- 鈴木ますみ・永田千春 1983 幼稚園入園に伴う対人関係の変容。国立音楽大学教育学科幼児教育専攻卒業論文。
- Takahashi, K. 1974 Development of dependency among female adolescents and young adults. *Japanese Psychological Research*, 16, 179-185.
- Takahashi, K. 1986 The role of the personal framework of social relationships in socialization studies. In H. Stevenson, H. Azuma & K. Hakuta (Eds.) *Child development and education in Japan*. New York: Freeman. 123-134.
- Takahashi, K. 1990 Affective relationships and lifelong development. In P. B. Baltes, D. L. Featherman & R. M. Lerner (Eds.) *Life-span development and behavior*, Vol. 10. Hillsdale, NJ: Erlbaum. 1-27.
- Takahashi, K. 1978/1998 PART (Picture Affective Relationships Test). Unpublished manuscript.
- Takahashi, K. & Majima, N. 1994 Transition from home to college dormitory: The role of preestablished affective relationships in adjustment to a new life. *Journal of Research on Adolescence*, 4, 367-384.

- Takahashi, K., Tamura, J. & Tokoro, M. 1997 Patterns of social relationships and psychological well-being among the elderly. *International Journal of Behavioral Development*, **21**, 417-430.
- Takahashi, K. & Sakamoto, A. in press Assessing social relationships in adolescents and adults: Constructing and validating the affective relationships Scale. *International Journal of Behavioral Development*.
- 高橋恵子・飯田亜紀 1998 高齢者の生活史にみる対人関係の変容. 日心62回大会, 29-30.
- Takahashi, K., Iida, A. & Tokoro, M. 1998 Type of affective relationships and psychological well-being among Japanese elderly adults: Family-type vs. friend-types vs. lone wolf-type. Paper presented at the 15th Biannual Meeting of ISSBD.
- 戸田正直 1992 感情:人を動かしている適応プログラム (認知科学選書24). 東京大学出版会.
- Toda, M. 1993~1998 The urge theory of emotion and cognition (English version). *School of Computer and Cognitive Sciences Technical Report*, 93-1-01~97-1-01. Institute for Advanced Studies in Artificial Intelligence, Chukyo University.
- Yates, M. & Youniss, J. 1999 *Roots of civic identity: International perspectives on community service and activism in youth*. New York: Cambridge University Press.
- Youniss, J. & Yates, M. 1997 *Community service and social responsibility in youth*. Chicago: University of Chicago Press.